

初期デューイの教育思想・試論(三)

——『学校と社会』のばあい——

本 間 真 宏

1 意図と方法 2 著書の背景 3 社会と学校 4 学校と生活(以上三号)

5 生活と教育 6 教育と発達(以上四号)

7 発達と労働 8 主体性と児童福祉(本号)

7 発達と労働

児童の成長・発達をよりよく促進するものとして教育はどのようなあるべきかということについて、前節では発達の側面に注目しながら論じてきた。

教育がそのような児童の発達にたいするひとつの働きかけであるといわれるとき、その働きかけの実体が、つぎに問われなければならない。そのことについて、デューイはいままでの叙述において工作室作業、

料理、裁縫、織物作業などを示して、具体的に描きだした。しかしながら、それらはあくまで児童の多面的

な発達を促がすための手段でしかない。デューイが創造的ないし生産的な労働ということを述べるとき、彼の思考の中心にある労働とはどのようなものなのであろうか。そしてそれは児童の発達とどのように関連しているのだろうか。それらについてみるのがここでの課題となる。

『学校と社会』の第六章は、「作業の心理」というタイトルを与えられている。ここで、あらかじめことわっておかなくてはならないことがある。すなわち、第五章「フレーベルの教育原理」および第八章「初等教

育における歴史科の目的」という二つの章の検討が、この叙述においては省かれていることである。そのことは検討する必要があるということではない。むしろ、第五章は幼児教育の本質を探るなかで、また第八章は、現在の我が国における初等教育の実状をあらためて考察するなかで無視することのできない部分である。それにもかかわらず省く理由は、冒頭に意図したところから当面の課題ではないと判断したところによる。(注1)

さて「作業とは」、デューイによれば「児童が行う一種の活動であって、それが社会生活において行われる或る形態の作業を再現したり乃至それと平行して行われたりするもののことである」(注2)ということになる。

そこで、作業のもつ心理的な重要性は、第一にそれが経験の知的な面と実践的な面とでの平衡を保つことである。

しかしながら、デューイは職業のための教育が目的

としている作業とは異なるものであることを指摘し、ここでのそれは、「作業それ自体のうちにあること」(注3)と慎重に区別していることに注目する必要がある。すなわち、その仕事が単なる日課あるいは習慣となってしまうてはならないのである。

第二にかんがえなければならぬのは、学校の課業における興味の地位についてである。我々は「興味」にかんして、つぎの二通りのものを厳密に区別しなければならぬとデューイはいう。すなわち、(1)真に必要な興味とどうでもよいようなそれ、(2)有益な興味と有害なそれ、(3)一時的な、あるいはその場の興奮を示すような興味と持続して永久に影響をもつようなそれ、というようなものである。

そのような区別のうえにたって、偶発的ではない、たしかな理由にもとづくものこそが真に教育的な性質のものであることがいえるのである。そして、それらを支える視点は、とりあえずつぎの三点に要約されている。第一に、人間が生活するための条件として働ら

くということが必要であつたのであり、そのような興味はなんらかの本能および習慣から生ずるものであること。第二に、これらの興味は、児童の内部で発達するにつれて、人類の過去における重要な諸活動を反復するばかりでなく、児童の現在の環境における重要な諸活動をも再現する(注4)と述べられているように、それは結局、人間の成長のなかで、文化が要約継承され、発展させられてゆくプロセスが指摘されている。それは児童が自己の周囲に行なわれているのを見た・感じたり・聞いたりするものによって不断に強められる。

ここで注意しておかなくてはならないことがある。さきに、デューイはその仕事が教育的なものであるかどうかということの判断のひとつを示していた。しかしながら、ここでデューイは児童を取り囲む諸々の社会生活の事実が必然的に何らかの関連を有していることを指摘している。すると、デューイのいう「作業それ自体が目的である」というような作業は、一体どの

ようなものであろうか。たんに、児童にとっては全面的な部分がその活動に費されるが故に、それは区別されなければならないというのであろうか。そのようなあいまいさは、デューイのすぐれた実践によって消えるものであろうか。否である。私はこのような点に、デューイの労働にたいする考え方をみとることができ。その点については後にみることにする。

第三に教育的な作業は一定の一般的な方向に連続的に組織づけられていなければならない。児童のばあい、その非連続的な思考ないし行動ということを余りに強調しすぎることは正しくない。

このようなデューイの思考はどのようにかんがえられるであろうか。さきに課題としておいた、彼の労働にたいする考え方を追求するなかで、その教育との関連にまで立ち入って論ずることにする。

「人間は生活するために働らかなければならなかった。その働らきのなかで、そしてその働らきを通して、人類は自然を支配し、かれら自身の生活の諸条件

をまもり、ゆたかにし、かれら自身の力の意識にめざめてきた……」(注5)と叙述されるデューイの労働観は、ある研究者が正しく指摘しているように、(注6)資本主義が独占段階に入って、工場法改正などによる修正資本主義の方向、およびそれと表裏の関係にある人権思想の浸透にともなう国民教育制度の発達の方向にみあうものであった。すなわち、それは、過去において有していた、労働が人間の全面的な活動としての意味を、機械化による分業のなかで部分的なものとしての意味しか有せず、その欠如した部分を教育に求めたところに存している。

この点において、労働は人間の全面的な活動であらねばならないとし、そこではじめて教育はその独自の意味を有するとするマルクス主義と明確に対立する点となる。(注6)

児童の作業においては「それ自体に意味がある」として、他のものを認容しなかったデューイの労働観に、全面的な発達を妨げられ、人間の創造としての、

真の意味での生産的な労働という意味を失いつつあった時代にたいするプロテストをみとることが必要なのではなからうか。あわせて、ますます歪曲化する教育をあらためて把え直そうとするデューイの積極的な意図を、我々は余りに見逃しすぎるのではなからうか。しかしながら、そのデューイにしてもその教育のなかで、人間の部分的な発達を改善しようとしながらも、結局「精神的労働」と「肉体的労働」との対立についてまで論じえなかったことについては、プラグマティズムとの関連においてあらためて論じられねばならない。(注7)

注1 後にみるように、児童にとって教育と福祉の問題はけっして分離されるものではなく統合されてなくてはならない。そしてその統合は、私の視点では、児童の発達を保障するという側面においてしかないと考えられる。なお、次の論文を参照のこと。田中未来「近代における児童の教育と福祉との思想的な関連について」本学紀要一、二、四号所収。

2 デューイ『学校と社会』春秋社二〇三頁

3 デューイ『前掲書』一〇三頁

4 デューイ『前掲書』一〇七頁

5 柳久雄『生活と労働の教育思想史』お茶の水書房、第六章参照のこと。

6 G・クラップ『マルクス主義の教育思想』明治図書
を参照のこと。

7 たとえば、芝田進午『人間性と人格の理論』青木書店、山本晴義『プラグマティズム』青木書店を参照のこと。

8 主体性と児童福祉——発達保障論の展開——

『学校と社会』の第七章である「注意の発達」を、標題のような形で論ずることは不可能ではないとしても相当の無理があることは承知している。しかも、初期デューイの教育思想を論ずることになっているところで。それについては、あらためて本稿の意図するところをかんがえてほしい。「注意」ということが、主体性をいうことと同じレベルではないことも知って

いるつもりである。ここでは第六節での約束を果しながら、全体を締めくくる意味でとりあげたことをいっておきたい。

児童の発達ということについて論じたものを、現在の段階で大別すると、(一)児童そのものについてみるものと、(二)児童そのものよりは彼らを取り囲む状況についてみているものという二通りがかんがえられ、それぞれをさらに二通りに分類することができる。すなわち、(一)についていうならば児童は(イ)福祉の対象であるか、(ロ)教育の対象であるかという見方であり、(二)については(イ)健全育成という視点から論じられるものと、(ロ)社会問題という視点から論じられるものである

(注1)

児童の諸問題を社会の進展との関連で論ずるさいに、従来の如く単純に分類してしまうことができなかったことがまずいわれねばならないが、さらに全体的に、総合された主体としての児童の諸問題を把握し、論じられなくてはならない現実についてかんがえ

ることの必要性を指摘しなくてはならない。

たとえば、児童の心理を理解することは、その発達の過程を十分に知ることを主にしつつも、その発達の保障が十分になされているかをつねに問うことでなくてはならない。そのことは、背後にある児童の生活の諸相をよりよく把握しなくてはならぬということの意味する。いままでの叙述がそのことを意図してきたことはいままでもない。

ここで、社会福祉の一分野としての児童福祉についてデューイとの関連でみることは意味のないことではない。衆知のように、社会福祉が、その対象を見出し、思想を発達させたのはイギリス、アメリカなどの先進資本主義国である。いわゆる資本主義の発達にもなう人間の非人間化に抗してその実践的課題を果してきたのが社会事業であり、デューイの生きた時代がひとつのエポックを画する時代であったことを知らねばならない。(注2)

すでに私は、児童が社会の変化のなかで犠牲とされ

る部分をもっとも多く引き受けざるをえない立場におかれていること、そしてデューイがその面に多くの注意を向けたことを指摘した。いま、いかにそれが児童にたいして思推的になされたかは、マルクス『資本論』第一巻、エンゲルス『イギリスにおける労働階級の状態』などをみれば一目瞭然である。我々はそのなかに逆に児童の本質を見出し、それをバネとして、児童が現代においてその主体性を保持するための足場を作らなければならない。

衆知のように、児童はその存在を、先行する世代によって承認され、その要求はまた、彼らによって代弁されなければならない。そのことが正しくなされてきたであろうか、また、なされているであろうか。まず問われねばならないことである。

私は、さきに児童という世代の本質を四つのアスペクトからみることを指摘した。それをさらに要約するならば、彼らは「保護」福祉と教育を正しく受けることによって、彼らが皆等しく有する「可能性」を伸張

させなければならない」ということができる。その可能性の伸張を保障するものとしての側面をみなければならぬのが今後の課題といえるであろう。(注3)

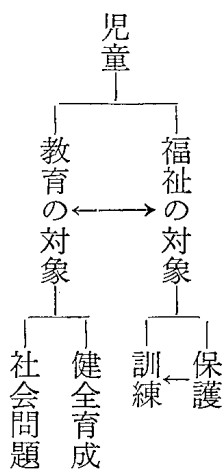
つぎに行政との関連でみることにする。児童はそこでは、とうてい主体ではありえない。大人ですらその福祉が認められない実状のなかで(注4) 児童の福祉はどのようになされているか。(注5) 福祉の実質を見定めることが要求されている。「児童福祉白書」が、危機的状況にあると指摘した状況があらためて問われなければならない。比喩的にいうならば、従来「少年非行は社会の鏡である」といわれてきたものが、それも含めてまさに「児童問題」こそそうであり、それは、社会の何を、どのように映しだしているかということなのである。

さらに、そのことがたんなる現象記述に終始してはならない。ただしく「児童問題」として把握されねばならない。そのひとつの視点が、児童の発達(する権利の)保障をかんがえるところにあることを指摘して

おきたい。

注1 副田義也「青少年問題研究の現状と展望」(『青少年問題』十二巻二号所収。)

図式化すると次のようになろうか。



2 たとえば、一番ヶ瀬康子『アメリカ社会福祉発達史』光生館、S・A・クイーン『西洋社会事業史』ミネルヴァ書房などを参照のこと。

3 いまままでの論議は Personality Development 論として心理的な側面が重視されてきた。それにたいして経済的な側面をかんがえなければならないことをこの言葉は意味している。

4 渡辺洋三『人権を考える―現代と自由権―』朝日新聞九月一六日付

5 社会福祉そのものが行政のなかで自己完結化している状況をまず把握しなくてはならない。それを打破

るための試みが最近、児童福祉の領域からなされていることに注目したい。たとえば、糸賀一雄『福祉の思想』（NHK出版局刊）など。少年法改正の動きのなかでのそれについては、拙稿「青少年問題とその福祉」（『社会事業研究』第七号）を参照されたい。

△付記▽

J・デューイの教育思想については、彼の生きた時代の問題とともに、今後も研究を続けてゆくつもりである。なお、「発達保障論」については、日本社会福祉学会第十六回大会記念論文集にある拙稿を読んで頂ければ幸いです。